HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ある黒人農民の世界
著者	上杉，忍; Shinobu，UESUGI
引用	北海学園大学人文論集(47)：109-161
発行日	2010-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

■北海学園人文学会　第 3 回例会　発表記録及び当日配布したレジュメ

ある黒人農民の世界

上　杉　　忍

司会　それでは，時間が来ましたので，第 3 回北海学園大学人文学会を始めたいと思います。

きょうもふたをあけてみたら，お懐かしい面々が来てくださり，また，学部生もちらほらと来てくださり，会としての幅の広さというのが今回になって出てきたなということで，物すごくうれしい思いであります。

人文学会というのは，去年，立ち上がった学会なのですが，まだ学則もなく，あいまいとした発展途上の学会でありまして，こういう形で実践を積み重ねていく中で，何か輪郭というのが見えてきたらいいなというふうに思っています。

きょうお話しいただくのは，本年度，北海学園大学の人文学部に着任されました上杉忍先生のお話を自己紹介を兼ねてしていただこうということで，先生にお願いいたしました。

まず，先生の経歴を簡単に，まず僕から御紹介させていただきます。

先生は東京都立大学を卒業されて，一橋大学で博士号をお取りになっております。職歴ですけれども，静岡大学人文学部，そして，横浜市立大学教授をへて，北海学園に今年から来られた先生でございます。専門はアメリカ史で，きょうは，そのアメリカ史に関する著作の翻訳ですね，かなり苦労されたということなのですね。その苦労話も含めてお話ししていただけるのだろうと思いますけれども，よろしくお願いしたいと思います。

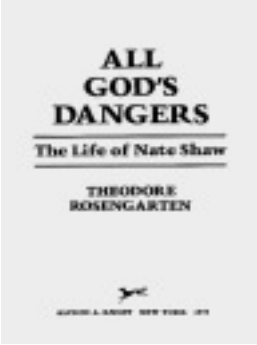
会の後には懇親会も予定されていますので，参加は自由です。終わったときにまた告知いたしますので，よろしくお願いします。

では，先生，よろしくお願いします。

上杉氏　初めまして，上杉と申します。よろしくお願いいたします。

今日の話の中心

きょうは，セオドア・ローゼンガーテンという方の著書の翻訳『アメリカ南部に生きる ── ある黒人農民の世界 ──』(原著名は *All Gods Dangers*)を取り上げます。この本は，文字を読めない黒人農民の語りをまとめたものです。この黒人老人は，最終的には，白人の権力と対決し，銃撃戦になり，12 年間監獄に入れられた人で，その名前は，ネッド・コッブという名前ですが，現場の人的関係を配慮して名前を変えてネイト・ショウと記述されています。



語り手ネッド・コッブは，1885 年から 1973 年まで，アラバマ州タラプーサ郡で過ごした人物で，お父さんは，15 歳まで奴隷でした。(ちなみに 1885 年と言うのは北海学園の前身が創立された年です。)いわゆる人種隔離体制が確立していく時代に生まれ，公民権運動の高揚期を見て将来に夢を抱きながら亡くなった黒人農民です。今日は，この語りからどんな南部農村黒人社会に住む人物の人間像が浮かんでくるかについてお話ししたいと思います。

長いスパンの中で公民権運動を捉えるべきだとの問題意識

今日の私の講演は，自己紹介も兼ねておりますので，はじめに，私が，この本に出会ったきっかけをお話しておいた方が良いと思います。

私は，いわゆる公民権運動の絶頂期と同時代に青年期を迎えました。公民権運動が始まったころは，いわゆる反共の嵐が吹いて，この運動は，「赤狩り」の後，突如として新たに生まれてきた運動だというふうに捉えられていました。いわゆるオールド・レフトとは断絶したニュー・レフトの時代というふうにして描かれてきたわけですが，私は，どうもおかしいと当時から感じておりました。アメリカではオールド・レフトはひどくやられてしまったけれども，何かが残っているに違いないということを直感的に感じており，この捉え方に違和感を持っておりました。この公民権運動の根っこというものは，1930 年代の労働農民運動や左翼の人民戦線運動の遺産を引き継いだものなのではないかと感じていたのです。

当時の公民権運動は，いわゆる赤狩りを恐れて，意図的に自分の根っこを隠してきた気配があります。例えば，公民権運動の出発点となったモントゴメリー・バスボイコット運動のヒロインとして，その後も全国的にもてはやされたローザ･パークスさんと言う黒人女性（『タイムズ』誌の「20 世紀アメリカの 100 人」の中の一人に選ばれています）がいますけれども，かの女は，もともとは，共産党が繰り広げた 1930 年代の運動にかかわっていたグループの中にいました。夫はこの運動にかかわっていたと言うことを共産党と言う言葉を用いずにご本人が自伝の中でそっと語っています。しかしかの女は公民権運動全体のヒロインでしたから，決してそれを公然とは口にしませんでした。そんなことをすれば公民権運動は「共産党の扇動」の結果だと言う南部白人優越主義者に格好の攻撃材料を与えることになるからです。

私は，そういう問題意識を持って，1930 年代の南部の農村の黒人地帯に入った共産党の活動の痕跡を掘り起こしてみたいと考えたわけです。当時，南部はアメリカの中でも最も抑圧的な社会で，この地域での共産党の活動

はきわめて困難で，それは，全くブラック・ホールのような状況でした。1980年代になっていたとはいえ，実際に現地に行ってみてもそんな痕跡は，全く見つからないかもしれないという不安がありました。

しかし，大学院を出て就職したばかりの私は，初めて長期のアメリカ研修のチャンスを得て，とにかく，「突撃！」でこの課題に取り組んでみようと決意したのです。

ちなみに，結論から申し上げますと，近年の公民権運動研究の動向は，私が直感的に感じていたのと，ほぼ，ぴったり同じになっています。公民権運動を冷戦期に始まると捉えるのではなく，1930年代から60年代という長いスパンでとらえ直さなければいけないと多くの代表的な研究者が主張し，そのような研究が次々と現れて来ています。1930年代の労働農民運動，左翼の統一戦線運動とのつながりは，公民権運動を評価する際に無視できないことが語られています。

私は，具体的にはシェアクロッパーズ・ユニオンという運動に目をつけました。アラバマ州に共産党が入って，主に黒人農民を組織したのがこのユニオンです。

今日，ご紹介いたしますこの本は，このシェアクロッパーズ・ユニオンの運動にかかわって捕まったネッド・コッブと出会ったハーバード大学の大学院生が，彼に聞き取りをして，本人の言葉を発音どおりに表記して1974年に出版し，各界に大変な衝撃を与えたものです。この英語は英文法に則ってはおらず，表記も発音どおりのため，翻訳には大変苦労いたしましたが，私たちが約6年を費やして，2006年にようやく出版しました。実は，息子と一緒に翻訳をしたわけですけれども，私の息子はもう十数年カナダにおりまして，私よりも大分英語ができますし，特に小説をたくさん読んでおりまして，ちょっと質問してみますと，これはこういう意味だと教えてくれるものですから，出版社の方の許可を得て協同翻訳者になってもらったわけです。

これまでの私の研究の概要

本題に入る前に，次にこの翻訳の出版を前後して私がこれまでにしてきた仕事の概要を写真をお見せしながらご紹介しておきたいと思います。

左側は私が最初にアラバマに調査に行ったときの調査旅行記『アメリカ南部黒人遅滞への旅』（新日本出版，1993 年）です。表紙の顔写真は，レモン・ジョンソンと言う方で，シェアクロッパーズ・ユニオンのラウンズ郡の地方リーダーでした。右側は，私が書いた博士論文をもとにしてまとめた本『アメリカ公民権運動への道』（岩波書店，1998 年）です。シェアクロッパーズ・ユニオンの運動をより広いアメリカ南部の支配構造の中に位置づけています。

私は，ここまでは，非常に小さな世界に埋没していたわけですが，次頁の左に掲載しました次の私の作品『二次大戦下のアメリカ民主主義』（講談社選書メチエ，2000 年）は，「ナショナリズムと戦争」というマクロの世界の中に黒人や日系人を位置づけて描いたものです。

右側の本は，最近のアメリカの監獄人口の激増を扱った著書の翻訳です。法的には黒人に対する人種差別が撤廃されたと言われながら，1980 年代以後のいわゆる新自由主義政策のもとで，黒人の多くはひどい貧困の中にあえいでおり，未来に希望を持てない状況に長いこと置かれています。その結果，とりわけ，監獄人口の激増という現象が引きおこされています。私は，現代の黒人問題の理解の鍵はここにあるのではないかと考え，最近，監獄問題についての研究を学び始めています。その手始めに翻訳したのがアンジェラ・デイヴィス著『監獄ビジネス』（岩波書店，2008 年）です。

1980 年には約 30 万であった監獄人口は，2006 年までに 230 万，約 8 倍にふえていますが，この間に殺人・レイプなどの凶悪犯罪がふえているかというと，90 年代以降むしろ減っているのです。監獄人口の激増の主な原因は，麻薬の取締りの強化です。黒人が多く使うと言う固形麻薬にかかわる犯罪には，特別重い刑が科せられるようになっており，麻薬によって大量の貧困者，特に黒人やヒスパニックの人々が長期にわたって収監されるようになっています。これは奴隷制から続く黒人に対する一つの束縛のシステムとして，監獄ビジネス，Prison Industrial Complex（産獄複合体）を形成するに至っています。監獄の拡大とその経営によって仕事や利潤を得ている人々が，この仕組みをしっかりと支え，もはや容易には，監獄人口を減らすことが出来ない状況が生まれているのです。「厳罰主義」は，社会正義の実現と言うよりは，彼らのビジネスを支えるスローガンになって

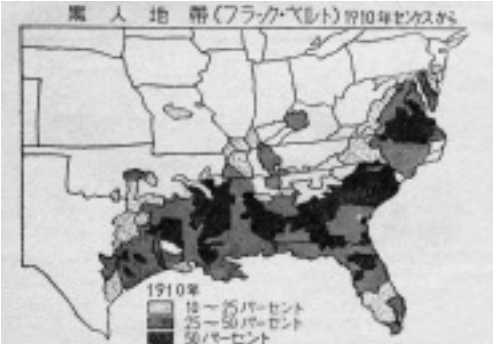
います。オバマ大統領でも止められない状況で，毎年 1000 万人が監獄を出入りして，それが社会全体に大きな問題を生み出している状況は今も基本的には変わっていません。収監人口の全人口に占める比率はアメリカが世界で最も多く，全世界の収監人口の 4 分の 1 はアメリカの囚人です。以上が私のこれまでの主な研究です。

これまでのシェアクロッパー・ユニオンについての研究

次に今日お話いたしますネッド・コッブが生まれ育って，シェアクロッパーズ・ユニオンに加わったアラバマ黒人地帯に関する私の調査について触れておきます。

下の地図では，1910 年の黒人人口が 50％を超えた地域を黒く塗ってあります。私が対象としているのはその中央部に位置しています。こここそが奴隷制，その後の人種隔離制度の中核をなす地域です。私は，ここに何度も調査に足を運びました。これからお話しするのはこの辺です。

最初に，シェアクロッパーズ・ユニオンについての論文[1] を社会学雑誌『ソーシャルフォーシズ』*(Social Forces)*に出したのはジョン・ビーチャー



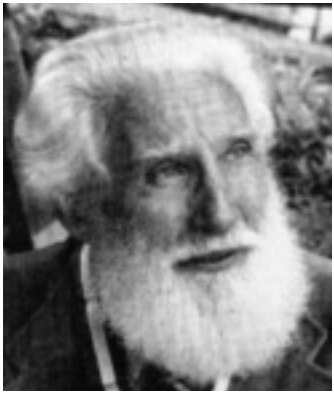
[1] John Beecher, “The Share Croppers’ Union in Alabama,” *Social Forces*, Vol. 13, No. 1, October 1934.

という人でした。1934年です。まだユニオンが崩壊していない段階で出ました。私は，この著者ジョン・ビーチャーにまず，会おうと思い，アメリカの知り合いにいろいろ手紙を書きました。すると，まもなくある方からそのビーチャーさんが，サンフランシスコで存命らしいという手紙をいただきました。まだインターネットなどと言う概念すら私の頭にはなかった時代でしたが，日本のアメリカン・センターに尋ねて見ると，サンフランシスコの電話帳を調べてくれ，二つの住所が見つかりました。私は，手紙を二つ，ジョン・ビーチャーあてに書きました。するとまもなく，ビーチャーさんの奥様から返事が来まして，「そのとおり。その論文を書いたのは私の夫です。ただ残念なことに，彼は三ヶ月前に亡くなりました」と。しかし，かの女は，「彼の記録をきちんととってあるので。ぜひおいでください」とのことでした。私は，アメリカ到着後早速かの女に会いに出かけました。

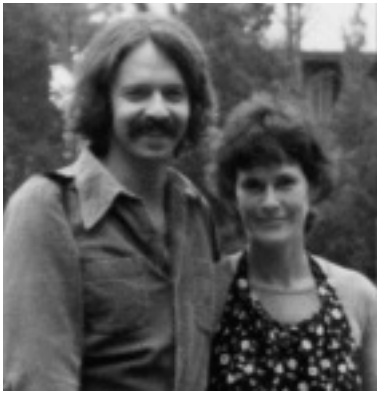
このジョン・ビーチャーさんの奥さんという方は，何とジョンの4番目の奥さんだったのですけれども，このジョン・ビーチャーという人の血統を聞いてもっと驚きました。ハリエット・ビーチャー・ストウという人物をご存知でしょうか。あの『アンクルトムの小屋』の作者ですが，彼は，この有名な作家の甥のお孫さんだったのです。少年時代，USスチールという鉄鋼会社の幹部だった父親とともにアラバマ州の鉄鋼業都市バーミングハムに1907年，彼はやってきました。1907年は，南部の基幹産業のひとつだった鉄鋼業を北部の資本が支配した年として記録されています。ジョン・ビーチャーは，思春期をこの都市で過ごし，夏休みには黒人たちと共に工場で労働したと語っています。大恐慌期にアラバマの事態の深刻さに胸を痛め，それまでウィスコンシン大学でディッケンズ研究に打ち込んでいた彼は，ノースカロライナ大学の社会学部の大学院に転じ，南部の人種問題や農業問題の研究を始めました。そして夏休みに実家に戻り，アラバマのシェアクロッパーズ・ユニオンに関する論文を書いたのです。

それは1934年の夏のことでしたから，このユニオンの運動はすでに弾圧され，復活を狙って準備している状態でしたが，運動の活動家たちはすでに地下にもぐっていて，彼は白人でありますから，そういう活動家たちと

あってインタビューすることはできませんでした。ですから，地元の新聞や共産党関係の文書などを使って論文を書く以外にありませんでした。彼は，1950 年代に「赤狩り」にやられサンフランシスコ大学から追放されて，その後，詩人として身を立てましたが，「詩であれば，構想力をめぐらしてもっと自由に書けたのだけれども，確実な証拠がない限り歴史の論文は書けず，とてもつらかった」と語っていました。しかし，その後ずっと，シェアクロッパーズ・ユニオンに関しては，彼の論文しか頼りになるものはありませんでした。



ジョン・ビーチャー



セオドア・ローゼンガーテンとデイル・ローゼン

ところが，ベトナム反戦時代運動が始まっていた 1969 年に，ハーバード大学の活動家カップルが，新しい道を切り開きました。それが，右側に写真を掲載したセオドア（テッド）・ローゼンガーテンさんとデイル・ローゼンさんご夫妻でした。このデイル・ローゼンさんが，卒業論文として現地に入ってシェアクロッパーズ・ユニオンについて調べたのですが，テッドもそれに同行し，その時にネッド・コッブと出会ったのです。ちなみにデイルさんの卒業論文は，非常に質の高いもので，その後各所で引用されています。

彼らがアラバマ州タラプーサ郡に入って調査した頃，かつてシェアク

ロッパーズ・ユニオンに加わり，その後もそこに残っていた人は，ほとんど誰もいなかったようです。みんな郡外に逃げてしまうか，ひそかに隠れていたものと思われます。たまたま，地元でネッド・コッブが存命だと言う話を聞きつけた二人は，彼を訪ねました。

二人がシェアクロッパーズ･ユニオンについて聞きたかったにも拘らず，ネッドは，なかなかそれについて話し始めず，まず自分がどういうふうな暮らしをしてきたかについて，延々と 8 時間もその日にしゃべり続けました。テッド・ローゼンガーテンは，ネッドの話には彼が今まで思っても見なかったような別世界があることを直感し，大学院に戻ってから，彼の話を博士論文と言う形でまとめることを決意したのです。

彼は，その後，二度にわたってこの地を訪れ，合計 120 時間のテーピングをして，約 200 の小話にまとめ，それを時代やテーマで分類して，彼のしゃべった言葉をそのまま発音のとおり綴りこの本に仕上げたのです。

私は，たまたま大学院生のときにある雑誌でこの本を知り，急いで手に入れました。この本のタイトルは，*All Gods Dangers* となっています。これは，訳しようがない英語でして，この妙なタイトルの本が，アメリカでベストセラーになり，全国書籍賞（National Book Award）を獲得したのです。

上の写真は，この本を翻訳し，最後の詰めに入った際に良くわからない

部分について直接，話を聞く為に 2005 年 3 月，お二人を訪ねたときのものですが，いくつかの質問に対して，じつは「ここは自分にも良くわからない」とテッドが言い出したのには少々驚きました。隣近所のインテリも混じって「あーだ，こーだ」と議論していましたが，結局良く分からなかった部分がいくつかありました。その場の雰囲気で理解するしかないのだということになりました。*All Gods Dangers* というタイトルの意味を知ろうとしていくら辞書引いても，実際には何の意味だか全然わかりません。それは，All Gods Dangers aint a white man と言う彼の語りの部分から採用されているのですが，綿の害虫が彼の農地を襲ってきて，それといかに闘うかという語りの中で出てきます。All Gods Dangers aint a white man だから，「我々の敵は白人だけではないのだ」という意味として理解できるのかとテッドに質問したら，「そのとおりだ」と言うのです。

ラウンズ郡シェアクロッパーズ・ユニオンとブラック・パンサー党

さて，次に写真をお示ししたのは，クライド・ジョンソンさんといって私が最も長くつき合った方で，1930 年代，シェアクロッパーズ・ユニオンの白人のオルガナイザーだった方です。彼は，ニューヨークからやってきて，ユニオンが弾圧をされた後，再建する仕事を始めた人です。彼が存命であることは，テッドとデイルが紹介してくれました。

私はジョン・ビーチャーがその論文で書いた初期のユニオンの活動につ

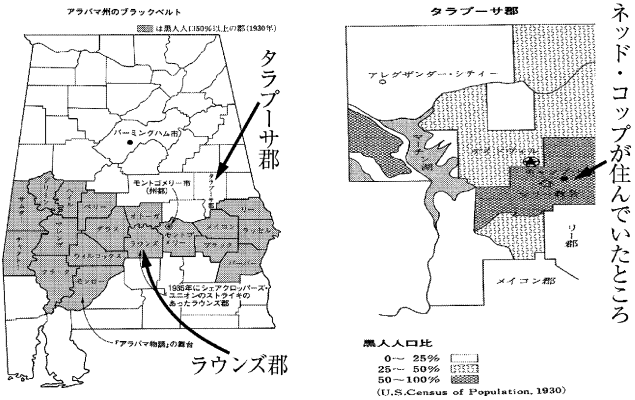
いては，一応おさらいはするけれども，自分はそこから先の時期のユニオン，まだ誰もインタビューしていない時代のユニオンについて調べようと考えていましたので，このクライド・ジョンソンと言う白人に頼ってラウンズ郡に入っていろいろ調べました。右側の写真は，1982 年のものですが，クライド・ジョンソンさんに，当時のラウンズ郡の地方支部の活動家レモン・ジョンソンさんと会ってもらった時の写真です。二人にとってそれは 50 年ぶりの再会でした。

当時，私は，研究資金に多少の余裕がありましたので，飛行機代とホテル代を出すので，ラウンズ郡に来てもらえないだろうかとクライドさんに頼んでみたのです。私の英語力では，現地の黒人老人の言葉は理解できないことがとても多いので，クライドさんに一緒にインタビューしてほしいとお願いしたのです。

上の写真は，ラウンズ郡でのユニオンの綿摘みストライキの最高指導者エディー・ブレーシーのお墓に，エディーの盟友だったレモン・ジョンソンさんが，クライド・ジョンソンさんと私を連れて行ってくれた時のものです。エディーは，最終的に家を取り囲まれて銃撃されて死にました。そのお墓には，1935 年 9 月 2 日没とあります。その日がこのストライキの終わりの日であったということです。

ネッド・コッブがいたのは，下の地図で示したこのタラプーサ郡ですが，私が一番長く入ったのはラウンズ郡です。左側の地図（1930 年）は，アラ

バマ州の郡のうち黒人人口が50％以上を占めている郡を黒く塗ってあります。ラウンズ郡は黒人人口が80％を超えていましたが，タラプーサ郡は，50％を越えていません。しかし，これを右側の地図で細かく見てみるとネッド・コッブが住んでいた所は，黒人人口が50％を超えています。



すでに述べましたように，私は，タラプーサ郡を一応おさらいした上で，綿摘みストライキがあったラウンズ郡に参りました。じつはこの郡は，1930年代のユニオンの運動とその後の公民権運動とがどうかかわっているかを見る上では格好の場所だと思われました。ご存知の方もおられると思いますが，1965年3月アラバマ州のセルマからモントゴメリーまでこのラウンズ郡を貫く80号線を投票権要求デモが5日間かけて行われまして，この行進の最中に，多くの黒人学生活動家が行進から飛び出して，この郡に黒人の組織に入りました。カーマイケルがオルグに入ったことで有名です。彼は，この郡の黒人活動家たちを結集して，独自の政党ブラック・パンサー党を結成させました。この郡は，黒人が圧倒的多数を占める地域ですから，もし黒人が選挙権を正常に行使すれば，ほぼ全部の公職を黒人が確保できる可能性が高かったのです。実際には，当初は白人に脅された黒人が白人の言うままに投票してしまい，なかなか困難だったのですが，今ではほぼ100％の公職を黒人が握っている地域です。ただ，黒人の大多数は，極めて

貧困で，白人の大半は大学卒業でなお裕福な暮らしをしているのは，昔のままです。

カリフォルニアのブラック･パンサー党は，この郡のブラック･パンサー党の名前を取ったもので，その名前は，この政党がこの郡のパンサー川のそばで組織されたことに由来しています。それは，この郡の黒人の政治組織として始まりました。この郡は，1960 年代の南部農村での黒人公民権運動の最前衛でした。ここで，1930 年代に，これも当時としては例外的な綿摘みストライキが闘われたのです。シェアクロッパーズ・ユニオンはこの辺で非常に強かったのですけれども，ここでブラック・パンサー党ができた。両者に何らかのつながりがあるというのが私の仮説でした。

この 80 号線は，バイオラ･ルイッツォーというミシガンから来た社会学の修士を持った主婦が殺された場所です。かの女は投票権要求デモを支えるために車を出して人々の輸送を手伝っていたのですが，ここを車で走っている最中に後ろから車で追って来たクー･クラックス･クランのメンバーに銃撃されたのです。今，その現場に下の写真のような記念碑が建てられています。

この殺人事件に関して，ラウンズ郡の裁判所で裁判がありましたが，犯人のクー・クラックス・クランのメンバーは，証拠不十分で無罪放免されました。当時，クランの中に FBI の要員がもぐりこんでおり，銃撃した人

物を特定する証言を行ったのですが，白人だけの陪審員たちは，無罪判決を出したのです。私は，たまたまこの郡内で，この裁判の陪審員になったという人物に会いましたが，彼は，「裁判長からこういう紙をもらった」のだと言って，小さな紙を出して私にそれを見せるのです。そこには「確実な証拠がない限り無罪」とありました。何はともあれ，明らかに有罪であっても無罪にするということは最初から決まっていたわけです。

この地域では黒人が白人によって殺されたことはたくさんあるのですけれども，裁判になることはありませんでした。白人が白人に殺される事件が起こって初めて，裁判が開かれるのが普通でした。

次の写真は，ラウンズ郡の裁判所の前の写真ですが，ここには南北戦争で亡くなった南軍兵士の名前を刻んだ像が建っています。奴隷制維持のための戦争で死んだ人々を「南部の大義」に命を捧げた人々として祀っているのです。しかし，その隣にもう一つの碑が建っています。それは，この郡に黒人公民権運動の応援に来て白人優越主義者によって射殺されたジョナサン・ダニエルズを祀る記念碑です。当時二人の白人が，公民権要求運動支援のためにここに入ってきて，黒人たちと一緒に監獄にぶち込まれて，そこを出た直後，みんなの見ている前で，トム・コールマンという地元の白人に銃撃されたのです。ダニエルズは即死，モリスローは半身不随の負傷を負いました。裁判がすぐ行われましたが，これも結局，白人だけの陪審員によって無罪判決が出されました。

この半身不随になったモリスローという人は，シカゴから来た人なのですけれども，1990 年代にここに帰ってきて，裁判所の前にダニエルズさん

の献身的な努力を祀る記念碑を建てようと提案し，この殺人事件を記念する像が建てられたのです。

先ほど触れましたバイオラ・ルイッツォーさんの記念碑や，こういう記念碑が建てられるというのは，ある意味では政治的に重要な意味があると思うのです。裁判所の前庭と言う公的な場所に，こういう記念碑が南軍兵士の記念碑と並んで建つということの意味を考えるととても大きな意味があると思うのです。この郡には彼らを銃撃したトム・コールマンがずっと暮らしていましたから，「あいつがやった」のだということはみんなが知っているわけですね。今では，かつて白人優越主義者の英雄だったコールマンが，「犯罪者」として社会的に糾弾され，黒人の公民権の為に命を捧げたダニエルズが，裁判所の前の記念碑において「正義の為に闘った英雄」として祀られているのです。このような像を建てた黒人たちが今ではいかに大きな力を持つに至ったかを示していると言えましょう。

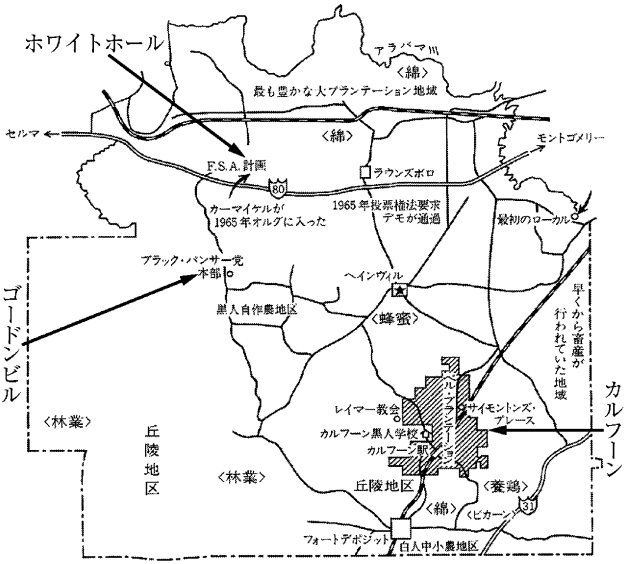
次の写真は，ラウンズ郡で南北戦争・再建期以来，初めて郡保安官に選ばれた黒人ジョン・ヒュレットさん，それから元シェアクロッパーズ・ユニオンのメンバーだったと言う当時郡政府委員会議長チャールズ・スミスさんです。このスミスさんは，公民権運動で郡政治を担うようになった人ですが，私が最初に出会ったユニオンのメンバーでした。この方は，ネッド・コッブ以外では，恐らくアメリカの研究者の中で私が最初に会ったシェアクロッパーズ・ユニオンのメンバーです。

次の写真は，1935 年 8 月綿摘みストライキが宣言されたカルフーン・ストアというＮ・Ｊ・ベル・プランテーションのストアだった場所です。実

際には，ストライキと言っても，労働者が農場に行かず，どこかに身を隠してしまうと言う戦術が取られたのです。白人たちが労働者を襲って農場に引きずり出すことが当たり前のこの社会で，奴隷制のもとでの逃亡のような戦術が取られたのです。そこで銃撃が始まりました。多くのスト参加者が森や大都市に逃げ込んだのですが，白人「自警団」につかまって拷問を受けたり，殺されたりした黒人も多数いました。家族も犠牲になりました。私が訪ねた当時，ここで，このストアを経営していたネッド・ハリソンという人と出会って話を聞いたところ，自分もそのときユニオンにいたという話をしてくれました。この人が私の発見した二番目のユニオン・メンバーでした。

それから，この郡の一番の中心メンバーのレモン・ジョンソンさんという人がこの郡内にいるという話がいろいろなところから伝わってまいりまして，私は，訪ねていきました。下の写真が，レモン・ジョンソンさんの家です。この人がラウンズ郡のユニオンの書記長でした。

そのストライキが結局，つぶされた直後，この郡でアラバマ州最大のニューディール黒人共同農場プロジェクトが始まりました。ほぼ時を同じくしてというか，数カ月ずれて始まったのですが，その相互関係は結局実証的には確認できませんでした。しかし，このホワイトホール・プロジェクトでのちに自作農になった黒人の子供たちがブラック・パンサー党の中心メンバーになったのです。その子供たちというのは，多くが比較的恵まれていて多くが大学へ行きましたが，彼らが，ここに帰ってきて，活動家になったのです。ブラック・パンサー党は，下の地図にありますように，このホワイトホール地区とゴードンビルというこの地域（パンサー党本部とある黒人自作農地域）とカルフーン地域（南東部のベル・プランテーション地区）と，三つから代表が出てつくられたと言われています。シェアクロッパーズ・ユニオンとブラック・パンサー党の両方にかかわっている人というのは数人いましたから，人的なつながりが確認できないわけではないのですが，ここのブラック・パンサー党のメンバーたちにシェアクロッパーズ・ユニオンを知っているかと言うと，ほとんどが「知らない」とい

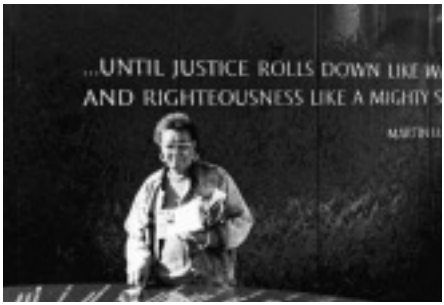


ラウンズ郡地図

うのです。シェアクロッパーズ・ユニオンのストライキの記憶が地域の共通の記憶としては残っていないのです。若者たちはまず全然，知らないというのが現状でありました。

次の写真は，1995 年に投票権法要求デモの 40 周年の集会がアラバマ州のセルマでありまして，そこに集まったかつてラウンズ郡で活動した人たちの写真です。すでにほとんどの人は，全国に散らばっており，この日のために全国から集まってきました。右から二人目が，ヒュレット保安官です。その後彼は，郡の最高権力者である遺言検認判事に選出されました。

次の写真は，アラバマ州の州都モントゴメリーにある記念碑です。ここには，公民権運動に命を捧げた白人，黒人，子供，大人，男，女を含む 40 人の名前が刻まれています。ワシントンのベトナム戦争記念碑をつくったことで有名な中国系アメリカ人マヤ・リンの設計で作られました。私がこ



こに行ったとき，たまたまこの女性に会いました。この女性は，ある人の名前の上に花をささげていたので，伺うと，自分のお兄さんがクー・クラックス・クランに橋の両脇から挟まれて殺されたという話をして下さいました。そして，私がシェアクロッパーズ・ユニオンについて調べているという話をし始めますと，「私はそれを知っている」と言うではありませんか。「レモン・ジョンソン，私は彼の親類だ」と。こういう歴史を刻み込んだ記念碑の前で，それに係わるそれ以外の記憶，歴史的経験をお互いに話し合う場ができました。

前置きで相当の時間を費やしてしまいましたが，急いで本題に入らせていただきます。

『アメリカ南部に生きる』の翻訳と書評

この本が出版されますと，朝日新聞がすぐ書評を掲載してくださいました。ちょっとこの本の雰囲気を理解してもらうために，これを配布したレジュメに載せておきました。「読み始めは，非常に退屈な本だった」と。「うんざりしてやめてしまおうかと思ったと。ところが，途中から驚くようなマリンスノーのごとく化学反応が起きて，やめられなくなった」と書いていて，第2パラグラフの最後ですね，「とにかく，この異常な記憶力は何だ！たとえば，綿花にたかる害虫を「つまみあげてよーく見てやった」ら，「やつは口先を花芽や実のさやにつきたて，今度は自分のしっぽをそのまわりに撃ちこんで卵を産みつける」と，ショウは回想する。このファーブル顔負けの観察眼を，彼は自分たちの黒人世界と，それにのしかかってくる白人の世界に向けて，しかもドキュメンタリー・フィルムみたいに克明に再現し得たのである。かくして成立した本書は，私の中の図式化されたディープ・サウスの黒人世界を大きく塗りかえた。白人地主のように振る舞う黒人地主がいる。小作人のショウに雇われて綿つみをする貧しい白人たちもいれば，おのれの卑劣な仕打ちの数々を，死ぬ前に黒人たちにわびてまわる白人商人もいる。とはいえ，黒人は白人の圧倒的な支配下にあり，あの

手この手の巧妙な手口で，しぼりとられるままに一生を終える者が大半だった。かつての黒人奴隷の子供として生まれたショウは，読み書きがまったくできなかったが，恐るべき観察力と記憶力に加え，用心深さと粘着質の行動力によって，白人地主らの迫害を一つ一つ退けて，やがて自動車まで所持する成功者となる。ショウの背骨を貫いていたのは，「自分を大切にし，誇りを失わない」気概であった。その彼も，だが，白人たちからの銃撃にやむを得ず応戦したあげく，不当な懲役 12 年の獄中生活を強いられる。それでも辛抱強く耐えに耐え，59 歳で釈放されるや，「わしの一生の中で一番激しく働いた」と言うくらい，再び野良仕事に没頭するのだ。最近かくも鼓舞された自伝を私は知らない。ショウは，よき家父長として懸命に生きた。しかし，みずから耕し広げた綿花畑から子供らは次々と去ってゆき，最愛の妻にも先立たれ，孤独な老人となった彼の前に若い大学院生，つまり本書の著者があらわれる。」

大体それでイメージができたと思いますけれども，次のページは，いかに翻訳が大変だったか，書評してくださった方が引用した部分の原文と翻訳を載せておきました（152 頁に掲載）が，時間があれば，また後で取り上げたいと思います。

ショウが生きた時代（1885-1973 年）の「南部」社会

レジュメ（本稿の末尾に掲載）の 1（153-154 頁）に，ショウが生きた時代の南部社会について箇条書きにまとめておきましたが，ここでは省略させていただきます。南部社会がアメリカ憲法に保障された市民社会の原則が貫徹されない社会であり，それは，経済制度，政治制度，そして社会的習慣によってしっかりと支えられ，少なくとも 1960 年代まで基本的な変化はなかったということについて説明しています。

しかし，そういう南部の支配システムについていろいろ固定的な説明がなされますが，注意せねばならないことは，現実には力関係によって多様な形態があったということです。このシステムは順次解体していきます。

第一次世界大戦及び第二次世界大戦を経て，シェアクロッピング制度は経済の軍事化にも助けられて再編され，1960年代には消滅して，大規模な機械や除草剤，化学肥料を使う農業に変貌し，黒人たちは大量に「清掃」されて北部に移住していきます。それとともに人種隔離体制は動揺し，いわゆる人種差別制度，あるいは投票権剝奪システムが弱体化していきます。

しかし，法的な人種隔離は解体していますけれども，実際には，例えば，今日，初等教育において約70％の黒人生徒が黒人だけの学校に通っていると言う数字が出ており，その人種隔離の現実はむしろ全体としては深まっています。住宅環境においても，黒人と白人の居住地域はほぼ完璧に分離されているという中で，人種隔離制度は再編され新たな姿をとって現れています。解体したというわけでは決してありません。

60年代に公民権法によってこういう人種隔離体制が崩壊したとされていますが，南部が全国化し，全国が南部化したというふうにも言われております。ちなみに，南アフリカでは，アパルトヘイトが廃止されましたが，それによって何が良くなったか。確かに良くなったのですが，大部分の黒人たちはなお貧困の底辺に位置づけられています。ここでは，アメリカのように監獄人口が極めて多い。南アフリカでは，ロシアについで世界第3番目の監獄収監人口比を誇っています。しかも，民営監獄も急激に発達していまして，アパルトヘイトで隔離されて来た黒人たちが今や監獄に隔離されているという状況に陥っています。新自由主義的な急激な「経済発展」は，そういうものを常に伴っているのです。

「自立」的労働の条件を求め続けたショウ

次にレジュメの2（154-155頁）に参ります。ショウは，生涯，債務奴隷制的プランテーション制度に立ち向かって，必死に工夫しながら自立的に労働し，蓄財して自立をはかろうとしました。人類学者のシドニー・ミンツという人は，ショウのような人物を「レンガのすき間からはい出る雑草のようなもの」と表現しています。レンガというのはプランテーションで，

雑草は自立的な小農民ですね。ショウは，自立的労働こそが自由の基礎であると考えていました。自分で判断して，失敗も自分で責任をとるということによって自由というのは得られるのだという考え方ですね。シェアクロッパーとして作業を細かく地主から指示されるのは非常に屈辱的だったと彼は語っています。「言われたまま，その日暮らしをするというのは奴隷根性であって，人間を駄目にする」と。

ショウは毎年，どこの土地に何エーカー，何を植えて，どのぐらい採れたかということを何十年にわたって全部覚えていました。彼は書くことをしませんから，インタビューすると毎年の農業経営について細かく，失敗したことも含めて全部覚えていた。それは自立的に労働したからだったと思います。

そして，自立するためには，多角経営による蓄財と投資が必要だと彼は信じていました。基本的換金作物，ギャンブル性が高い綿花ですが，それはもちろん栽培しないと金になりませんから栽培に全力を挙げますが，その他に，鍛冶の作業，籠づくり，薪売り，枕木づくりなどのよる賃稼ぎ，キルト，ミルク，バター，シロップ，ハチミツ，野菜，果物の行商。その他には，ラバを用いた材木曳き，綿繰り工場での作業などで農閑期に働いてお金をためました。ためた金は，第一に生産手段に投じます。まず役畜，馬具等ですね。人種差別的な市場に自立的に参加するには工夫が必要でした。さまざまな有益な情報を求めてあちこち行って交渉する。同じものでも白人が売るのと黒人が売るのとでは値段が違う。そこで，白人の自尊心を刺激して白人に頼んで，「あなたが売ればもっと高く売れる，その差額をいくらか分けるから売ってきてくれ」と言う取引をする。そういう形で金をためて行きました。

命令されないで自立的に労働できる条件というのは，借金の抵当に当てる財産を少しでも持つと言うことでした。具体的には，何も持たないシェアクロッパーは，食料その他の生活必需品の前借りをしなければ食べていけないわけで，その債務の抵当にその年にできる作物を当てざるをえないのです。それによって作物の種類，作付面積，栽培方法，手順を地主が指

示する権利を確保することになるのです。

アメリカ南部で農地を耕すのに絶対的に必要なのは役畜，ラバです。ラバという財産を持っていれば，これを抵当に入れ，自立的な農業経営が出来るようになります。ラバというものがいかに大事なものだったかは，ネイト・ショウの語りを読めばよくわかります。ラバを持っていれば，自分が何を栽培するかを決めることが出来，債務を払えなければこのラバを売ればいいわけです。ラバがあれば材木引きにこれを使って金を稼ぐことが出来ます。ですから，ネイトは，金がたまるとまずラバの購入準備に取り掛かりました。

それから，もう一つはどこに投資したかというと，家族の家事道具，自家用車，ぜいたくな食材の購入に充てました。家父長として自分は，子供たちにうまいものを食べさせてやった，女房に食べさせてやった，子供に車を買ってやった，これがものすごくうれしいのですね。家父長として自分が満足するということは彼の人生の大きな目標になっていました。

ネイトが必死に努力したもう一つの目標は，自家用食料生産による債務の抑制でした。野菜や牛乳，豚，鶏，卵など自家用作物をさまざまな工夫を凝らして生産して保存します。その保存方法についても実に詳しく話しています。シェアクロッピング制度のもとでは，食べるもの，着るもの，それを前借で商人や地主から借りて，利子をつけて返すということになっているわけで，それが実に高利なのですね。ですから，これを借りないということが自立するためのとても重要な条件となるわけです。彼は，周りから見れば，かなり良い暮らしをしていて，「黒人なのにこんな暮らしをしている。肉を食っている」と白人にねたまれたと自慢げに書いています。

次に，黒人たちにとっての「自由」という概念は，どこから来ているか，だれから学んだのかについて考えて見ます。奴隷制時代のときに，奴隷たちにとって自由がないかというとそうではありません。奴隷制時代の生活のうち，まず「日の出から日の入り」は労働で搾られる。これは自由ではない。しかし，「日の入りから日の出」までは，自分たちの時間だと捉えられてきました。しかし，商品作物栽培のために奴隷主監督の下で働く以外

の時間に，自分の自家菜園で食料を生産して食料を自給しなさいと奴隷主が奴隷に任せることがしばしば行われました。奴隷にインセンティブを与えてたくさん栽培させれば，奴隷主の奴隷維持コストの節約になるわけです。この自家菜園で自分たちが消費する以上のものが生産できれば，奴隷たちは，それを毎週金曜日に町に行って売ることがありました。奴隷がお金をもらう。場合によってはそれを蓄えて自由を買う。金を稼ぐ労働，これは自由の時間なのですね。

ですから，食料生産というのは自由な時間，換金作物栽培は奴隷の時間という様な概念が，彼らの頭の中にあって，彼らはごく自然に自立的な労働をするためには，土地とラバが必要だと感じていたわけです。僕らは日本的感覚から，土地さえあれば何とかなると考えがちですが，アメリカでは，土地があっても農業はできない。役畜がなければ，農業生産はできない。彼らにとって第一に必要なのは，土地よりもむしろ役畜，特にラバなのですね。ショウは，ラバについて非常に多くを語っています。一頭いくらで買った，何という名前をつけた，どういう性格を持って，どうやって調教したか，どうやって死んだか，全部詳しく話しています。それを読んで，南北戦争で奴隷から解放された黒人たちが，「40 エーカーと一頭のラバ」と言うスローガンをどこからともなく全南部に広がる声で，一斉に要求したことの意味が良くわかりました。一頭のラバと言っても私には良く分からなかったのですけれども，一頭のラバというのがいかに重要か，土地がなくてもラバさえあれば自立的な労働ができるわけで，自立的な労働こそが頭を活性化させて，成長することができる，それこそが「自由」だと彼らが認識していたことが良く理解できました。

ですから，地主は，債務不履行の際に，土地を取り上げるよりもまず役畜を取り上げる。役畜を蓄積した黒人指導者をどうやっていじめるかというと，例えば，役畜の餌に毒を混ぜて殺してしまう。そうすると，もう誰かに依存して労働せざるを得なくなるわけです。公民権運動の地域指導者のファニー・ルー・ヘイマーさんという有名な黒人女性がいますが，その人の自伝で自分のうちでは豚が何頭，牛が何頭，ラバが何頭いたので，何

とか自立していたけれども，殺虫剤を餌の中にまぜられて家畜が死んでしまった。その後，人の下で働くしかなくなってしまったことについて語っています。

ラバというのは彼らにとっては，日常生活の中心にあった。ラバへの愛情は単なる愛情ではないのです。ちなみにこの地方では，ラバのほうが馬より値段が高い。

南部農村の人種・階級関係をショウはどのように見ていたか

それでは，次にレジュメの3（155-156頁）に移りまして，ショウが，この南部社会の人種・階級関係をどのように捉えていたかについて見てみたいと思います。彼は，みずからの経験に基づいて，南部農村社会の人種階級関係の具体的な分析を行い，したたかに身を守ろうとしました。彼は，黒人と白人，お金持ちと貧乏人，そういう関係を具体的に見て，そのすき間を縫って，相手の矛盾を利用して生き抜きました。例えば，白人商人たちがネイト・ショウを困らせようと思って自分たちから借金をしない限り彼に肥料を売ろうとしなかったのです。ショウは，肥料がないと十分な作物ができないわけです。どうしようと考え，ブラックという肥料商人が村の奥で商売をしていることを知って，彼に売ってくれと聞いてみました。このブラックにとっても黒人との商売は利益になるわけですが，かといって他の白人たちとの関係も悪くしたくないわけです。そこで，彼はネイトに「最終的には売ってもいいけれども，俺とあいつとの関係悪くなるから，まずは，もう一回，彼の所に行って聞いてみて欲しい」と言うのです。そこで，もう一回行くと，販売を拒否した商人は，ネイトの裏にこのブラックがいることに感づいて，それでは売ろうという話になるのです。このように白人の分裂を利用する。それはいろいろなところに歩き回って情報をかき集めて，人間関係を知らないとできません。白人をひとまとめに理解しないで，そのわずかの隙間をやんわりと突く。その人間関係の分析は，この社会の権力関係の生き生きとした分析になっているといえましょう。

何と，彼は 400 人を超える具体的な人名を挙げて，彼はこうした，あいつはこうしたと，それぞれの人について，銀行家，地主，肥料会社の職員，ラバ商人，綿繰り工場経営者，保安官，判事，町長，医者などについて語っています。特に白人の医者と黒人は深い関係を持っています。病気の際にはお世話にならねばなりませんし，お産のときに来てもらう黒人もかなりいたようです。ですから，白人に対する冷静な分析をして，白人はみんな敵だというような見方は決してしていません。

また，彼は，白人労働者と一緒に材木ひきをし，労働者としての連帯感を育てたかというとそうでもありませんでした。材木を伐採する場所がなくなり，遠いところから材木収集工場に運ぶことになったのですが，白人労働者たちは,遠い所から運ぶので手数料を上げて欲しいと要求しました。しかし，経営者は，それを拒否し，白人たちを解雇してしまうと言うことがありました。ところが，ネイトは，その条件をのんで働き，白人に代わって，その仕事の指揮者になりました。あとで白人たちが，家族を養わねばならないので，おれに仕事をくれと言ってくるのですが，ショウは譲りませんでした。要するに彼はスト破りをやったわけです。ただ，自分にとっては，労働するということは誇りだと。

立派な家父長になろうとしたショウ

次にレジュメの 4（156-157 頁）に移りますが，ここにありますように，ショウの人生の基本目標の中には，模範的家父長でありたいと言う強い意志があったことが彼の語りの中で読み取れます。反面教師として父親がいました。父親は 15 歳まで奴隷で，解放後，一生懸命金を稼いだのですけれども，なぜか土地を買わなかった。「父さんは馬鹿だった」とショウは言います。父さんは，若いころには一生懸命，蓄財したけれども，二度にわたって白人地主に丸裸にされて，もう自立を放棄して，その日暮らしになった。妻や子供を野良で働かせ，あるいは子供を労働者として他人に貸し出し，自分は狩猟遊び，妻子に対する暴力，食料独占，食べ物を一番良いものを

自分だけで食べてしまう，女遊び，婚外子を作る。この右側に図（レジュメ4の末尾，156頁）がありますが，これは，父親を中心とした系図です。一番下に黒く塗ったネイト・ショウがあります。その上の右側にヘイズ・ショウとありますが，これが父親です。父親はどういう人だったかというと，まず，鉄道の線のような線は婚外性関係でできた子供です。最初にプリシーラと子どもを作りました。次にマティルダと結婚しましたが，この人は死んでしまいます。2番目に結婚したのがライザです。これがネイト・ショウのお母さんです。ちなみにこのネイト・ショウのお母さんは白人男性の子供です。ヘイズはかの女と結婚している最中にシルバータービンという女性と性的関係ができ，ウイリー・タービンという子が生まれ，氏名不詳の女性とも関係ができてバドという子供ができ，ライザが死ぬと3度目の結婚をする。さらに，その間にグラップという女性と関係ができる。最終的には4度の結婚をしました。ヘイズの性関係は，奴隷制社会の伝統を受け継いだものともいえますが，黒人社会での典型的な姿とは決していえないと思います。

白人男性と黒人女性との性的関係についてちょっとだけ触れておきますが，ショウの母親と彼の妻の母親は，いずれも白人男性の子供で，黒人社会では，白人との性的関係が身近に多くあることを推定させます。もちろん，これは結婚関係ではありませんでした。言うまでもなく，異人種間結婚は禁止されていましたが，白人男性と黒人女性の間の性関係は稀ではありませんでした。逆，すなわち，白人女性と黒人男性の性関係はほとんど皆無で，もししそれが判明すると「レイプ」と見なされ，黒人男性がリンチによってこのコミュニティーから抹殺されるのが普通でした。

黒人同士の場合でも，とても複雑な性関係があるのですが，だれとだれの間に子供ができたかは，厳密に社会で確認されていたようです。死亡率が非常に高いので，子連れ再婚は珍しくないのですが，移動が少ない地域社会での性的関係は非常に複雑になります。しかし，黒人の間では，昔から6親等以内の性的関係は厳格に抑制されていたと言われています。ですから，ヘイズ・ショウの複雑な系図から見ると，確かに6親等以内で性的

関係は結んでいません。親が死ぬとその兄弟が子供を引き取ったり，親類の遺児を引き取ったりすることはよくあったようです。それは，一種の労働力の奪い合いという面があります。扶養の義務と労働力への期待という二面性があるわけで，どの子は誰がもらうかをめぐって黒人同士で争いがあります。そういうことがショウの話にも出てきます。子どもは財産だとする考え方がまだ残っています。奴隷制の名残だと言えましょう。

ショウ自体は，理想的家父長になりたいと思っていた男性でした。妻や子供に暴力を振るわず，女は野良で働かせない。白人の家庭に妻や娘を働きに出させない。この地域では，家事労働として黒人女性を白人が求めるわけですが，この仕事は，そこの家の主人や息子によるレイプの危険性が常にあるために，誇り高い黒人男性は，女性たちを決して白人の家には出しませんでした。せめてもの「家父長権の主張」だったのです。

ネイトは，教育ある妻に常に感謝していました。かの女の場合には文字が読めた。いろいろな契約をするときに債務契約をかの女が読んで，不正を見抜き，契約にサインすることを拒否するときに助けてくれたと述べています。それから作物の分量の計算もかの女がやってくれました。

また，自分が家父長として子供たちにも食べるものを食べさせ，自分の親のようにいいものを独占するようなことはしなかったと語っています。

「歴史」の中に自分を位置づけていたショウ

5（157-158 頁），に参ります。

ショウは，歴史の中に自分を位置づけながら生きていたことがわかります。いろいろなところで歴史を語っていますけれども，自分がいよいよこの世を去る時が来たと感じるようになった際に，自分は悔いのない，歴史に恥じない生き方をしたのだということを語ります。祖母や父親からの話，奴隷制の現実，その後の偽りの自由というのもおばあさんたちから話を聞いた。それから，お父さんたちが投票権を売り渡していたこと，それから，売り渡すことすらできなくなり参政権を完全に剝奪された経験を見ていて

それを語っています。

第一次世界大戦の際に彼は徴兵されませんでした。それは，彼が働き者で地元の白人たちにとって，搾取のしがいがあったからではないかと述べています。黒人帰還兵が帰ってきたときにはひどい扱いを受けたという話が出てまいります。あるいは，公民権運動の成果も見つめていて，「最後に，必ず黒人が屈辱から抜け出す日が来ると聖書には書いてある。北部から正義の救済者が必ず来る。悪いやつらはみんな早死にした。出獄後，わしに謝りに来た白人たちや，あなたは正しいことをしたと言いにきた白人もいた」として，自分は悔いのない人生を送ったと話しています。

なぜショウは白人当局から選ばれたのか

最後になりますが，なぜ彼は当局から選ばれたか。選ばれた彼がたじろがなかったのはなぜかということでまとめにしたいと思います。

ショウは，白人ですら「模範的な黒人」と認めざるを得ない「危険な黒人」でした。要するに，自立的によく働く。「黒人はだめだ」という根拠に白人たちは，「黒人は生来怠惰で鞭なしにはまともに働かない」ことを挙げてきましたが，彼は，自立的に懸命に働く。それは，この社会ではふさわしくない存在であり，潜在的に白人に対する挑戦を意味していました。

それから，彼は，妻を白人のもとに家政婦に出すのを拒否しました。これも反抗的姿勢でした。大体，シェアクロッパーズ・ユニオンのリーダーの多くは奥さんを白人家庭に出さなかったようです。

また彼は，1918 年，タッカーさんの連帯証文署名を拒否しました。これはどういうものかというと，地主が小作の 5 人に連帯の債務を与えて，全員が返すまで全員が債務から解放されないという契約なのですね。彼の妻が契約文章の中にそれを発見してネイトに教えてくれましたので，彼は署名を拒否をしました。

さらに 1924 年，ショウは，連邦土地銀行から融資を受けて，土地を購入した。地元の地主から金を借りないで連邦政府から借りました。それによっ

て地元の白人の支配から抜け出ようとしたわけですけれども，地主たちは，それを許すまいとなにやかやと彼を債務に陥れようと近づいてきました。1932 年には，連邦農業融資銀行にも申請して，肥料と生活必需品の融資を受けました。そうすることによって，地主・商人からの解放を目指したのです。この時一緒に申請に行った 4 人がいずれもシェアクロッパーズ・ユニオンのメンバーで，衝突事件があったときに殺されたり，投獄されたりした人でした。こういう彼の行為を見ていた地元白人権力者たちは，彼にすでに前から目をつけていたものと思われます。

ショウが，白人権力との対決に至った理由は，次の 3 点にまとめられると思います。第 1 に，今まで自分が正当に築き上げた自分の財産を守るのは，正当な行為であると確信していたことです。そして第 2 に，家族を守るという使命感です。「男らしさ」を示すのは彼の生涯の目標でした。第 3 は，連邦政府や北部のユニオンに対する信頼です。北部から来たユニオンの指導者は，ショウの，「自分がしていることは正しい」という確信を裏づけてくれました。

ショウは，ユニオンの地元指導者としては異色でした。私が調べたユニオンの地元指導者の多くは，教会の信者代表であったり，第一次世界大戦の帰還兵であったり，賭博好きの自作農であったりしましたが，ショウは，いずれにも当たりません。そういう意味では，非常に特異な存在でありました。

ま　と　め

ネイト・ショウは，一般に想像される共産主義的人間像とはほど遠い存在でした。彼は，共産主義者によって組織されたシェアクロッパーズ・ユニオンの最も断固とした活動家であったわけですけれども，彼は徹底的個人主義者であって，自分の利益はあくまでも自分で守り抜くことが基本だと考えていました。「貧しさを分かち合う」というような人間像が，一般的には共産主義的人間像だと思われるかもしれませんが，彼の場合は，そう

いうことはほとんどありませんでした。

繰り返しになりますが，彼は，自由の基礎は，自己の労働力と生産物の自己管理だと考えていました。あくなき富の追求に彼の人生は貫かれていました。これに対して彼の娘たちは，「それがお父さんの白人性だ」と批判したと言います。しかし，彼は，「自分は，勤勉な労働を誇りとしている。その日暮らしとギャンブル的な生活はだめなんだ。それは，奴隷の生活なんだ」と断固として反論しています。

そして，自由と独立の基礎は，勤勉な労働とラバの所有がその第一歩であると彼は考え必死に蓄財し，ラバの獲得とその維持に努めました。

さらに，彼の人生は，家父長としての責任感と強い誇りに貫かれていました。女はあくまでも被保護者だと思っていました。字が読めた妻に助けてもらうことはあっても，重要な判断を必要とする際に妻と相談した気配がありません。それは子どもたちの教育にも現れています。生産の場は男の場で，家庭は女の場であるから，家庭には口は出さないけれども，生産の主な担い手になる息子たちには強い関心を抱き，熱心に教育し，細かくその性格について述べています。しかし，娘についての語りはほとんどありません。娘については，その夫が暴力を振るうことについて心配し，その夫に説得を試みたことが語られている程度です。

また，彼は，白人の多様性を現実的に認識していて，この世の中は，ビッグマン（金持ち）とリトルマン（貧乏人）の対立だというふうにして理解をしてきました。ですから，黒人の中にも無慈悲な搾取者がいたことを述べる一方で，黒人たちに親近感を抱く白人もいた事についても述べています。北部から来た白人に対しては非常に強い期待を抱いたのですが，ユニオンの地元のメンバーは黒人でもあまり信用していた形跡がありません。大半は臆病で裏切ったと切り捨てます。また，獄中生活中に，家族を支えてくれたのは北部のユニオンで，彼らは毎月5ドル，家に送ってくれたといっています。あるいは親類が家族の面倒を見てくれたと語っています。

ショウは，黒人コミュニティーの典型的なリーダーではなかったようです。群れない誇り高き一匹オオカミであったといえると思います。

以上で，まとめを終わります。時間が大分オーバーしてしまいましたので，この辺で終わりにして，質問を受けてお話ししたいと思います。

質　　疑

司会　先生どうもありがとうございました。非常に興味深いお話でした。

細部にこそ神は宿ると言いますけれども，ネイト・ショウの記憶は非常に具体的で，細かいところにまで行き渡っているがゆえに，彼の生きる力になったということなのだろうと思います。また，ネイト・ショウの驚異的な記憶の話をお伺いしながら，私の目の前に彼が体験した世界が開けてくるような，そういう感じがしました。

御質問等ございましたら，挙手をお願いいたします。

では，郡司先生どうぞ。

郡司淳氏　近代史や現代史を門外漢というのは恥ずかしいことだと思うのですが，私は，アメリカの世界がよくわからないので質問します。お話を伺っていて，ショウという人物の理想とすべき人間像，例えば経済的自立なくして精神的な自立はあり得ないといった考え方だとか，家父長的な父親像，そういう人間像・人間類型は，どこから与えられたものだと考えたらよいのでしょうか。もしかしたら，それは白人社会がモデルなのではないか，という気もしないでもないのですが，その辺のところをお伺いしたいのですけれども。

上杉氏　私もずっと考えていたのですけれども，やはり奴隷制時代の経験というのは基礎にあると思うのですね。自分は家族を持てなかったと。妻や子供に対する支配権というのは，奴隷制時代にはないわけです。奴隷とは言え，多くの場合，奴隷制がはじまってしばらくすると，奴隷は「家族」を持つことができるようになっていたのですが，しかし，奴隷の夫は，いつでも自分の妻や娘を主人やその他の白人たちにレイプされてしまう。独占できなかったんです。場合によっては家族を売り飛ばされてしまうこともありました。したがって，彼らにとっては，やっぱり家父長権を確立す

るというのは夢だったと思うのですね。また，先ほど言いましたが，彼らは，奴隷制時代に，他人のために命令されて労働する時間は，奴隷の時間だと認識していたわけです。ただ，自分が消費できるものの生産のための労働は自由な労働であり，彼らは一生懸命労働する。かつて社会主義国で各農民に自分で販売できる作物の生産を認めるとすごく良いものをつくるということが，よくあったと言われていますが，それと同じで，黒人たちは自分たちの家族が消費できるもののための生産には工夫して一生懸命労働しました。そして，主人のための労働はできるだけサボったわけです。そのような奴隷制時代の経験の中から「自由な時間」の内実を経験的に多くの黒人が学んだのだと思われます。自由な時間に，自立的に自然と闘って工夫して生産する。ショウは，ジャガイモをどうやって保存すべきかとか，豚をどう飼いならしたかとか，非常に細かく，いろいろな工夫をしたことについて語っています。あるときは，子豚が逃げてしまったので，その後，餌に自分の小便をかけてやった。そうしたら，もうそのあとは豚が完全に懐いてしまって，ペットのように離れようとしなかったいというようなことを話しています。彼は文字を知らないけれども，そういう自立的な工夫をして頭脳を大いに発達させ，記憶も研ぎ澄ましたのだと思います。

彼は反面教師にしてきた父親からも学んでいます。狩猟，釣り，籠つくりなど，そういう経験を親と一緒にやってきました。そして父親がその名人だったと誇らしく語っています。その得意技を白人に教えてやったとも自慢しています。彼が，監獄に入れられたときに，看守に籠をつくってやって，魚をとるやり方を教えてやり，気に入られた経験についても語っています。そういう自慢話がいろいろと出てまいります。

このような「レンガのすき間からはい出る雑草のように」と表現される独立自営の精神は，カリブ海の奴隷制社会の中で存在していた現象なのですけれども，ショウはそれを体現していたと考えることができます。

共産主義者が入ってきて，南部の抑圧的体制に対して，挑戦していたこのような自立的な人たちを組織したのがシェアクロッパーズ・ユニオンだったわけですが，この担い手たちには，いわゆる「共産主義的精神」と

いうのはまず全然見出せないのです。果たして「共産主義的精神」とは何か，現在ではなかなか定義しにくいのが現状ですが。あえて言えば，ショウは「アメリカの典型的独立自営農民の精神」の持ち主だったのではないでしょうか。おっしゃるとおり，奴隷制時代，自分たちが出来ないことで白人たちがしていることを「自由」の概念として捉えていたと言う面も大いにあると思いますが，私は彼ら自身の経験の中にあった「自由」を拡大することが彼らにとっての「自由」だったと言う面は忘れてはいけないと思うのです。

司会　では，アイトル先生お願いします。

テレングト・アイトル氏　非常におもしろく聞かせていただきました。このレジュメの2頁(154-155頁)に書評がありますが，非常に感心して，それに焦点を合わせて先生の話を聞くと，ローゼンガーテンと主人公は非常にホメロスに似ているように，本当に抜群の記憶力と能力があって，知性があって，情熱的に語る。『ワシントン・ポスト』や『ニューヨーク・タイムズ』ではその物語性を高く評価しています。テキストの読みというのはさまざまな立場から考えられるけれども，この語りがなかったら，あの豊かな歴史が全部読み取れないのではないかと感じます。先生はもちろん，それについて具体的な事実を押えて，解説もしておられますが，しかしそれは物語性ですか，語り，ナラティブ，そういったものは非常に有効に働いており，しかも，記録者，その人が疲労困憊で，語り手がまだ語りたいという。これは大河物語とか，あるいは英雄叙事詩のようなジャンルのものとしてみればもっと有効に語られているように私は感じていますけれども，しかし，その物語の中の人物性とか個性とか，あるいは人格とか，それを求めれば，少し偏って，例えば4回も結婚して，男性中心主義など……。

上杉氏　4回結婚したのはお父さんですね。本人ではなくて。そういう父親を見て，反面教師として生きてきた。自分はそうしないと。

アイトル氏　しかもその主人公は誇り高い一匹オオカミのようで。さまざまな面では，今の我々の労働社会とか，あるいはイデオロギーを求める社会の中では，こういう主人公の人物像がかけ離れてしまい，神話性という

か，物語性が強いということを感じてしまうですけれど。

上杉氏　やっぱりこれは一つの文学作品として読んでいただければありがたいと，著者のローゼンガーテンさんが語っています。

アイトル氏　先生の英文のテキストの方には，緻密に全部メモを入れて……。

そこで一種の現実とテキストとの関係，あれは，物語と現実の歴史と関係の間に生まれた膨大な作品だとして理解することがおもしろいですね。

上杉氏　だから,ただ歴史を明らかにするためにこれを読んでいるのでは，おもしろくないと思うのですね。この語りは，世界というものを感覚的に理解するものとして意義があるように思っています。

この本は，大学院のときに発見したのですが，正直に言って，ちょっと読んだってとてもわからないのです。皆さんちょっと見てくださったと思うのですけれども，絶対これは訳しようがないというような部分がたくさんあります。当時私は，シェアクロッパーズ・ユニオンに関するところだけは丁寧に読みましたけれども，前のほうは読めなかった。でも，これはちゃんと翻訳しなければいけないと思って，必死になって，1980年代ぐらいから始めたのです。でも何度も挫折しました。そこで出版社を決めてしまえば出さざるをえないだろうと思って彩流社に頼んだのです。それが完成の6年前でした。

だから，苦労の一部をちょっとでも想像していただけたらと思って，翻訳の部分をレジュメに載せたのですが。(152頁)

司会　大谷先生お願いします。

大谷通順氏　興味深いお話どうもありがとうございました。ちょっと細かいところを教えていただきたいのですけれども，レジュメの8頁(159-160頁）のところ，一番下ですけれども，ショウはリーダーとしては余りだめなわけですよね。一般的な地方のユニオンの指導者というのは，3つのタイプが典型なのでしょうけれども，やっぱり人望がある条件ということになりますかね。新聞社とか，あるいはヒーローとか。そうすると，3番目が経済力ということなのでしょうか。

上杉氏　賭博好きがなぜリーダーになれるかという所でしょうか？

大谷氏　ええ。賭博のところが非常に気になったのです。

上杉氏　これは皆さんが興味を持ってくださり質問されるものですから，調べてみたのですけれども，確かに黒人社会における賭博に関して多少の研究はあるのですけれども，賭博はそもそも大部分が非合法ですから，きちっとした研究が難しかったようです。しかし，インタビューをしてみるといろいろな人から，教会の裏で黒人たちは好んで賭博をやっていたという話を聞くのです。お墓の写真をお見せしましたが，この郡のユニオンの最高指導者エディー・ブレーシーの隣に住んでいたレモン・ジョンソンさんからこの人についての話を聞きました。ブレイシーは自作農として非常に有能な農民だったようですが，まともには教会に行かず，毎週いろいろなところでギャンブルをやって，ネットワークをつくって，シェアクロッパーズ・ユニオンのメンバーを組織していったようです。同じ郡だけではなくて，ほかの郡までメンバーが広がっていくときの一つのネットワークとして賭博があったということが分かりました。皆さんから良く聞かれるのですが，それ以上のことは分かりませんでした。

ただ，ネイト・ショウは，一切賭博はやらなかった。あるとき，お金が手に入ったら，ある白人から「賭ける金ができてよかったな」と言われましたが，これに対して「おれは，絶対ギャンブルなんかやらない」とあとで言っています。

1940 年代に社会学者が総出で編集し，その後のアメリカ政府の黒人政策に大きな影響を与えた『アメリカン・ディレンマ』と言う百科事典みたいな大きな本があるのですけれども，そこで黒人の賭博のネットワークの話について少し触れていますが，その後はほとんど誰も研究していません。

司会　ほかにございませんか。常見先生どうぞ。

常見信代氏　文字を持たない社会や人々の歴史を掘り起こすという点に非常に勉強させていただきました。この点で，このショウという人が恐るべき記憶力だったというのですが，それは，ある意味，彼の個人的な能力によるものでしょうか。例えば，文字は持たなくても，家の中とか仲間や地

域が語りの文化みたいなものを持っていたということではないでしょうか。

上杉氏　飛ばしてしまったのですけれども，レジュメの3頁(152頁)の一番上のところで，小農民コミュニティーが解体し，大規模機械，化学薬品農業に移行するに伴って衰退してしまった語りの文化，とあります。南部の「近代化」以前は，テレビもないし，小農民が老若男女が，暇を見つけては集まって「語りあう」場が日常的にあり，家族の「語り」が子供たちの歴史認識に大きな役割を果たしてきたのです。ところが，機械化大規模農場になると小農民集落は姿を消し，そういう語りの場がどんどんなくなって，子供たちが歴史を知るのは，教科書で読むしかないという大きな変化が起こりました。今までは家族の中で，じいさん，ばあさんからいろいろな話を聞くことができて，それが文化として伝わったけれども，もうこの時代を最後になくなってしまった。

そういう意味では，今，日本でも学生さんたちの歴史離れというのがあるのは，そういう地域社会や家族的結合が分解してしまっていることと深くかかわっていると思います。親から，じいさん，ばあさんからあるいは近所の人から話を聞く機会がほとんどないという状況の下で，歴史を受けとめる感性そのものが変わってきてしまっている。だから，教科書として学んでも，自分とのつながりとして歴史を理解することがますます難しくなっているように思います。

ですから，ネイト・ショウは，歴史の中に生きていたとお話ししたのですけれども，彼は語りの中で，それなりに歴史というものを，近隣の老人の語りを聞きながら，自分がどういうふうに，どこにいたかを自分なりに理解し，必ず自分たちは解放されるという聖書の教えを用いて歴史を理解してきたのです。そういう文化の中に生きていたのだと思います。

司会　桑原先生お願いします。

桑原俊一氏　どうもありがとうございました。今，先生が最後のところでちょっとお話が出てきたのですけれども，教会との関係についてお伺いします。コミュニティーという存在があるいはあったとしても，教会だとか，

そういう種類のものが全くこのショウには関係がなかったのでしょか。最後のところの目次の中に神へのお告げというのがありまして，それらしいかかわりが多少あったのかなという感じもないわけではないのですけれども。

上杉氏　彼の話の中では，教会は，生活の上では出てくるのですね。ただ，そのときには，自分はこういう新しい馬車を買ったとか，見せびらかすためにそれをみんなの前で見せた，みんなが妬んで何か言ったとかいう話ばかりで，教会の中の話はほとんど出てきません。奥さんのハナは結構信心深い人で，それで彼が監獄に入った時に神に目覚めた事を聞き，非常に喜んでくれました。その後，彼は，洗礼を受けるのですけれども，教会の信者の間で指導者になったということはなかったようです。自分が神とつき合いを始めたというだけであって，教会の中で人間関係をつくったということはほとんど語られていません。そういう意味では，彼は独立独歩の信者だったのではないかという気がします。教会の中で牧師さんたちから何か教わったという話は何も語っていません。おばあさんが聖書にはこう書いてあったとか，そういうのは聞いていて，自分なりの聖書の理解だと思うのですけれども聖書の話は何回か出てきます。

ちょっと興味深い発見だったのでこの地域の黒人教会について少しお話したいのですが，この地域では教会の礼拝が毎週あるかというと，そうでないのですね。２週に１回なのです。広いところに教会が散在している状況で，信者たちは，自分の教会には礼拝がある２週に１回行って，それ以外の週の日曜日には他の教会に行く。そういう形でお互いにネットワークをつくったようです。牧師さんは教会を一日の間に幾つも回りほんの少ししか信者と時間を過ごすことが出来ません。ですから，牧師さんの信者の間での影響力はあまり大きくはありませんでした。信者の代表（ディーコン）がとても重要な役割を果たしています。彼らは，隔週ごとに別の教会に行って黒人教会のネットワークの結び目になっている。それで隔週の土曜日には自分の教会の信者たちと一緒に食事の準備をしたり，さまざまなことをして交流する。日曜日の礼拝の後は，野球をしたり，いろいろなつ

き合いをするのが習慣でした。そこでユニオンのメンバー（多くがディーコンだったのですが）が周りを警戒しつつ，ユニオンについて話をしたようです。

隔週の教会礼拝をし，黒人教会信者のネットワークを築くという工夫がいつごろ始まったものなのか，今まで見たところでは，どの本にも書いていませんでしたので，これも今後の面白いテーマになりそうです。

桑原氏　本にはというのはどういう本のことでしょうか。

上杉氏　黒人教会に関する研究書の中と言う意味です。

桑原氏　そういう巡回牧師は当時一般的ではなかったかと思います。黒人教会の場合はどういうが理由が上げられるでしょうか。

上杉氏　第１次世界大戦後，黒人が大量に北部に移住し始め，ただでさえ人口希薄な農村地域では，一つの黒人教会の信者の数が減り，一人の牧師さんを抱えられなくなりましたので，牧師さんが何箇所も黒人教会を回るというのは，この当時は一般的でした。

桑原氏　教会活動とユニオンとの関係はどうだったのでしょうか。

上杉氏　毎週，礼拝をやると信者たちが一箇所の教会に縛りつけられてしまい，ネットワークがつくりにくいということがあります。ユニオンを組織するネットワークの形成と言う点では，牧師さんが黒人教会を巡回することよりも，信者たちが相互に教会を訪問しあうことの方が重要です。

司会　そろそろ時間なのですが，最後にお一方，もし，ぜひともという方がいらっしゃれば，どうでしょう。では，アイトル先生，どうぞ。

アイトル氏　セオドア・ローゼンガーテンはユダヤ人ですが，ユダヤ人と黒人との関係ということについて，もし何か示唆することがあれば。

上杉氏　セオドア・ローゼンガーテンとデイル・ローゼンご夫妻は，ともにユダヤ人なのですけれども，恐らく両方ともその家族は，1930 年代，左翼だったと思います。1930 年代に黒人問題について一番敏感に反応できた白人は多くがユダヤ人，あるいは共産主義者でした。私がつき合った人たちの多くはユダヤ人でした。

北部からやってきたオルガナイザーのクライド・ジョンソンさんは，デ

ンマーク系の人ですけれども，奥さんはユダヤ人。やっぱりユダヤ系というのは，特に 1930 年代のラディカルとは深い関係があったと思います。

司会　先生ありがとうございました。時間が過ぎましたので，この辺で終わりにしたいと思います。

上杉氏　どうもありがとうございました。

司会　先生ありがとうございました。（拍手）

まだ話し足りないという方もいらっしゃると思います。懇親会を今から計画しておりますので，参加は自由でございますので，学生の方も，恐らく学生の方には学割があるのではないかなというふうに思っていますので，参加される方は参加してください。

それで場所等については，表に置いておいたのですけれども，チラシがありまして，幸香菜というところで行います。午後 6 時からですけれども，プリントです。参加自由でございます。参加されるという方，もし今決めていらっしゃる方がいたら，ちょっと手を挙げてくださいませんか。もちろん自由なので，今から，手を挙げていなくても参加できますので。

どうしましょう，村岡先生。みんなで行きますか。位置的に。歩いて 10 分，15 分ぐらいなので，では，5 時 40 分ぐらいに 4 号館入り口あたりに集合ということにいたしましょうか。よろしいですか。5 時 40 分ぐらいに 4 号館入り口あたりに集合して，皆さんで行くことにしたいと思います。では，これで終わります。（拍手）

添付資料（当日配布したレジュメ）

セオドア・ローゼンガーテン著・上杉　忍・上杉健志訳『アメリカ南部に生きる ── ある黒人農民の世界 ──』（彩流社，2006 年）586 頁＋18 頁，Theodore Rosengarten, *All God's Dangers: The Life of Nate Shaw*, Alfred A. Knopf, 1974　から何が読み取れるか

北海学園大学人文学部　上　杉　　忍

今日の話の中心

白人権力と対決し，12 年間刑務所で暮らした文字を読めない黒人農民ネイト・ショウ（Nate Shaw［Ned Cobb］: 1885-1973, Tallapoosa, Alabama：元奴隷の子，人種隔離体制確立期に生まれ，公民権運動の高揚期を見て亡くなった黒人農民）の「語り」から，どんな南部農村黒人の社会像・人間像が浮かんでくるか。

この本に出会ったきっかけ

1960 年代に公民権運動は，冷戦下で突如として起こったものではなく，1930 年代の労働･農民運動の遺産を引き継いだもの。「赤狩り」を恐れて，意図的に隠されてきたその伝統。1930 年代の南部農村黒人地帯に入った共産党の活動の痕跡の掘り起こし作業。近年の公民権運動研究の動向。より長いスパンで見直す。左翼労働農民運動への注目。

書　　評

ジャック・ガイガー「ローゼンガーテンは，黒いホメロスを発見した。この黒人は驚くべき知的な才能でもって『黒いオデュッセイア』を……情熱的に語り始めた。」『ニューヨーク・タイムズ』

ロバート・コール「フォークナーの作品に感じるのと同様の啓発的な力，珠玉のような言葉，痛快な皮肉と嘲笑のユーモアを備えている」『ワシントン・ポスト』

スタッズ・ターケル「これは人間の堅忍不抜に対する賛歌である。全てが具体的，……雄弁な神様のお告げの言葉のように聞こえる。」『ニュー・レパブリック』

朝日新聞　2006年7月2日　第3種郵便物認可

読書

■ アメリカ南部に生きる ／セオドア・ローゼンガーテン〔著〕

恐るべき記憶力 観察力 行動力！

正直に言うと、この本、途中で投げ出そうか思った。奴隷解放後のアメリカ南部に生きた黒人の長老の一人語りなのだが、日常の些事に話が及ぶすぎているように思えたのである。綿花畑で働くのがどんなに大変な作業かは実感として伝わってくるのだけれど、四百字詰め原稿用紙にして千七百枚以上にのぼろうかという著の半ばを過ぎまで、ドラマティックな展開に欠けるのである。

ところが、このネイト・ショウという老人の叙述のスタイルに馴染むにつれ、彼の言葉が深海に降り積もるマリン・スノーのごとく心の底に沈澱してゆき、ある地点を超えたあたりで、"化学変化"が起こる。まるで海底の機雷が次から次へと炸裂するかのように、驚愕が広がってゆくのである。とにかく、この異常な記憶力は何だ（1）。

たとえば、綿花にたかる害虫を一つまみあげてよーく見てやったら、今度は自分の尻尾を花芽や実の莢につきたて、卵を産み付ける――をそのまわりに撃ちこんで卵を孵化させるまで、ショウは回想する。このファーブル顔負けの観察眼を、彼は自分たち黒人の世界と、それにのしかかってくる白人の世界に向け、しかもドキュメンタリー・フィルムみたいに克明に再現しえたのである。

かくして成立した本書は、私の中の図式化されたディープ・サウスの黒人世界を大きく揺り動かした。白人地主のように振る舞う黒人地主がいる。小作人のショウに雇われて綿つみをする貧しい白人たちもいれば、おのれの束ね仕打ちの数々を、死ぬ前に黒人たちに詫びてまわる白人商人もいる。とはいえ、黒人は白人の圧倒的な支配下にあり、あの手この手の巧妙な手口で、しぼりとられるままに一生を終える者が大半なのだった。

かつての黒人奴隷の子として生まれたショウは、読み書きがまったくできなかった。が、恐るべき観察力と記憶力に加え、用心深さと粘着質の行動力によって、白人地主たちからの迫害をひとつひとつ退け、やがて自動車まで所持する成功者となる。ショウの背骨を貫いていたのは、「自分を大切にし、誇りを失わない」気概であった。

その彼も、だが、白人たちからの銃撃にやむをえず応戦しあげく、不当な懲役十二年の獄中生活を強いられる。それでも辛抱強く耐えに耐え、五十九歳で釈放される。「わしの一生の中で一番激しく働いた」と言うべくらい、再び自分仕事に没頭するのだ。最近かくも鼓舞された自伝を、私は知らない。

ショウは、よき家父長として懸命に生きたしかし、自ら耕し広げた綿花畑から子供らは次々に去ってゆき、最愛の妻にも先立たれ、孤独な老人となった彼の前に、若い白人の大学院生、つまり本書の著者が現れる。合計百二十時間ものインタビューをまとめた作品は、アメリカで1974年に発表され、大きな反響を呼んだ。その邦訳の出版が今日にまで至ったのは、南部農村の"黒人英語"や、英文法からはずれた独特の表現が範出したためである。幾度もの挫折を乗り越え、全訳に成功した訳者久子に敬意を表したい。

［評］野村　進
ジャーナリスト・拓殖大学教授

野村進（拓殖大学教授）氏の書評『朝日新聞』2006 年 7 月 2 日（付録）

底辺からの歴史学と伝統的農村社会の語りの文化

白人アメリカが見たくない黒人の「誇り高い人間の精神世界」を描き出した作品。小農民コミュニティーが解体し，大規模機械・化学薬品農業に移行するに伴って，衰退してしまった「語りの文化」の文字化。遺言，日記，手紙，出生・死亡記録，納税記録とは異質の史料。

翻訳の困難（付録）。ほぼ本人の発音のまま表記（独自の文法）

I've pulled them squares open and caught em in all their stages of life: found the old egg in there, and I've found him just hatched out and he's right white like a worm, just a little spot in there, that's him; and if he's a little older he looks green-colored and sappy; and after he gets grown he's a old ashy-colored rascal, his wings is gray like ash. I've known him from the first to the last. I've picked him up and looked at him close. He's just a insect, but really, he's unusual to me. I can't thoroughly understand the nature of a boll weevil. He's a kind of insect that he'll develop in different colors right quick. He'll grow up to be, if he lives to get old enough —don't take him very long to get old—he'll grow to be as big around as a fly. He's a very short fellow, but he's bigger than a corn weevil. And he'll stick that bill in a cotton pod, then he'll shoot his tail back around there and deposit a egg—that's the way he runs his business. Then he done with that square, he done ruint it, and he hunts him another pod. And he's a very creepin fellow, he gets about, too; he'll ruin a stalk of cotton in a night's time. He crawls along gradually from one square to another; he gets on a limb where it's rolled off with blooms or young squares and he traces his way from one to the next, and he punctures every one of em just about, in a short while. Then he's creepin on, all over that stalk. Maybe he's so numerous sometime you can catch three or four, as high as half a dozen or more, that many off of one stalk of cotton.

いろいろな花芽を開くと，ボルウィーヴィルの一生がわかる。まだ卵のうちのも見つけた。孵化したばかりで，白いイモムシのようなのもいる。まだ小さくて点みたいなもんだ。そいつが成長すると，緑色になって元気よく動き回る。成虫になると，灰色の悪魔になる。羽は灰のような汚い灰色だ。わしはやつの生まれるところから死ぬところまで観察した。つまみ上げてよーく見てやったさ。やつはただの虫なんだが，わしにとっては大敵だ。ボルウィーヴィルがどんな虫なのか，一部始終知っているわけじゃないが，やつは，いろいろな色に変わる虫だった。こいつはちょっとの間に成長するんだが，成虫はハエくらいの大きさになった。小さい虫だが，トウモロコシにつく虫よりは大きかった。そしてやつは口先を花芽や実の莢につきたて，今度は自分の尻尾をそのまわりに撃ちこんで卵を産み付ける。それがこの虫の生きざまだ。そうやってこいつは一つのつぼみを台無しにして，次の芽に移って行くんだ。こいつはのそのそ動き回って，一晩で一本の綿の茎をダメにしてしまう。花芽から花芽へと這って動くんだ。茎を登って花か花芽のついている枝までやってきて，また次のところまで行く。ちょっとの間に，全部の花芽に穴をあけてしまうんだ。そうやって，やつらは茎じゅうを這いずり回る。茎が虫だらけになることもあるんだよ。一つの茎から一度に三，四匹，ときには六匹も捕まえることが出来るんだ。

1．ショウが生きた時代（1885-1973 年）の「南部」社会

● シェアクロッピング制プランテーション経済を中核とする南部独自の経済・政治・社会体制（国民統合が遅れた相対的に独自な社会）

◇ Share Cropping（高利貸し的債務奴隷制），Crop Lien（単一作物栽培の強制），

◇ Convict Lease（「本人の意に反する労役（奴隷制）」を禁止した憲法修正第 13 条は，例外として「犯罪に対する刑罰としての本人の意に反する労役」を認め，強制労働制度の道を残した。），Chain Gang Labor（公共事業，州立農場，炭鉱），Lynching（白人共同体による黒人共同体に対する脅迫，白人女性の「保護」），Disfranchisement（憲法修正第 15 条をすり抜け，読み書きテスト，人頭税），Jury System（陪審員選出の恣意性），Jim Crow 法（1896 年最高裁「分離すれども平等」判決，学校その他の公共施設）。

◇ 南部の民主党一党独裁体制（合衆国憲法体制からの隔離，地方的共和主義，州権論）

◇ 南部独自の「名誉の文化」（Cult of Honor）：決闘の文化。

◇ 力関係によって多様な形態。不平等な文書契約（連帯証文，抵当物件を無限拡大，債務不履行の際の抵当物件指定）。小作農の家族労働権，栽培作物の決定権，農作業の指示権，綿繰権，生産物の作物販売権（価格に人種差別）。地元商人の協定による特定個人との取引拒否。

● シェアクロッピング制度の動揺・危機・解体

第 1 次世界大戦による国民統合の進行。大規模な連邦軍軍事基地の南部進出。黒人の北部への大移住。大恐慌期の南部農業の危機，ニューディール，「上からの近代化」（減反・補助金政策）が行われ，経済の軍事化にも助けられて，1960 年までには単一作物シェアクロッピング制プランテーションは消滅。多角的大規模機械・化学薬品・肥料への再編。黒人小作農の大量清掃。北部移住。（経済史研究の発展）

● 人種隔離体制の動揺・危機・「解体」（再編）

第二次世界大戦への黒人の大量動員，白人のみの予備選挙違憲判決，

軍隊内の人種統合の開始，1954 年最高裁「分離は不平等」判決（公立学校の人種隔離撤廃を命令)。冷戦下の公民権運動の高揚と公民権法(1964 年)，投票権法（1965 年）の成立による人種隔離体制の「解体」(再編)。(社会史研究の高揚)，

- その後，「南部」の全国化，全国の「南部化」。

2．ショウは，生涯，債務奴隷制的プランテーション制度に立ち向かい，必死に工夫しながら自立的に労働し，蓄財して，自立を守ろうとした。(「レンガの隙間から這い出る雑草」(シドニー・ミンツ))

- 自立的労働こそ「自由」の基礎

ショウは，少年時代にある白人地主の下に貸しだされ，仕事の管理を任され，多くを学び自立してやっていく自信を得た。結婚直後，シェアクロッパーとして，作業を細かく指示される屈辱感も経験。言われたままの「その日暮らし」は，奴隷根性。ショウは，ほとんど毎年の労働経験を年ごとに詳細に記憶していた。

- 多角的経営による蓄財と投資（生産手段と家族）

ショウは，基本的換金作物栽培（ギャンブル性が高い）労働以外に，鍛冶作業，籠作り，薪売り，枕木作り，キルト・ミルク・バター・シロップ・蜂蜜・野菜・果物などの行商，その他の賃仕事（材木引き，綿繰工場での作業）などで金を稼ぎ，生産手段（役畜や馬具，荷馬車，農具）の購入（差別的市場への自立的参加，個人的商品売買取引，値引き，分割払い，利子の交渉）により，自立的労働（命令されない労働）の条件を整えるとともに，家族の家事道具，自家用車，贅沢な食材を購入し，家父長としての権威を高めようとした。自らの労働に基づく蓄財は誇るべきこと。

- 自給用食糧生産による債務の抑制

ショウは，豆，芋，トウモロコシ，野菜，牛乳，豚・鶏・卵など自家消費用作物をさまざまな工夫を凝らして生産し，保存。それによって，高利貸し的現物前借りを最小限に抑制し，大きな債務を負わず，豊かな

暮らし。貧しい白人からもねたまれる。

- ラバは黒人農民ショウの自立の第１のステップ。

解放奴隷たちの叫び「40 acres and a Mule」の世界。ラバを自分で所有していれば，作物質権を地主に握られることはなく，地主から農作業を細かく指図されることはない。南部農業ではラバなしの土地は無意味。ラバがあれば作物を販売するために運搬することもできる。地主・商人は債務不履行の際の抵当物件差し押さえに役畜を優先。小作農を自らの支配下に置く条件としての役畜差し押さえ。

ラバを使って材木積み出し作業で金を稼ぐが，どんなに高賃金をもらえる仕事（製材所）があってもラバを遊ばせておく仕事は続けない。ラバは，ショウの日常生活の中心にいた。ラバへの愛情，ラバは単なる役畜ではなく，精神的存在。馬より高価。

- 害虫や悪天候との戦い。緻密な観察。神様の仕業。「人間の悪さの半分にもならん。」
- 大規模プランテーション経営に対する対案としての協同農場という発想は全く見出せない。（ニューディール期の社会主義者，Southern Tenant Farmers Union の協同農場構想）。

３．ショウは，自らの経験にもとづいて南部農村社会の人種・階級関係の具体的な分析を行い，したたかに身を守ろうとした。All God's Dangers aint a white man の世界観。

- 綿花栽培社会の基本的力関係の認識

地主，銀行家，肥料会社の職員，ラバ商人，綿繰り工場経営者，保安官，判事，町長，医者）の網の目を具体的に描く。400 人を超える具体的な人名が登場。黒人から奪い取ろうとする白人たちに対する日常的な「粘着質で巧みな抵抗」を通じて観察。白人の威力をよく理解し，無益な抵抗はせず。

- 白人社会に対する冷静な分析。

良い白人。変化する白人。白人の間の矛盾や優越感も利用。白人の間

の矛盾に関する情報。貧しい白人を助けた経験。「黒人をいじめる時にだけしか許されない『小さな白人』の発言権」「『大きな白人』に楯突けない『小さな白人』」

- 白人労働者に対する労働者としての連帯感はない。スト破りもした。
- 怠惰で奴隷根性がぬけ切れない黒人への軽蔑。

4．ショウの人生は，「模範的家父長」であろうとする意志に貫かれていた。

- 反面教師としての父親（家父長としての責任を負わない男）

15歳まで奴隷。解放後，金を稼いだが土地を買わず。若い頃蓄財したが，二度にわたって白人地主に「丸裸」にされ，自立を放棄。妻や子供を野良で働かせ，あるいは他人に貸し出し，自分は狩猟遊びに。妻や子供に対する暴力，食糧独占。「女遊び」，婚外子。複雑な婚姻・性関係。子供を手放さないために学校にはやらず。21歳まで子どもは親の財産(奴隷)。

- 白人男性と黒人女性との性的関係

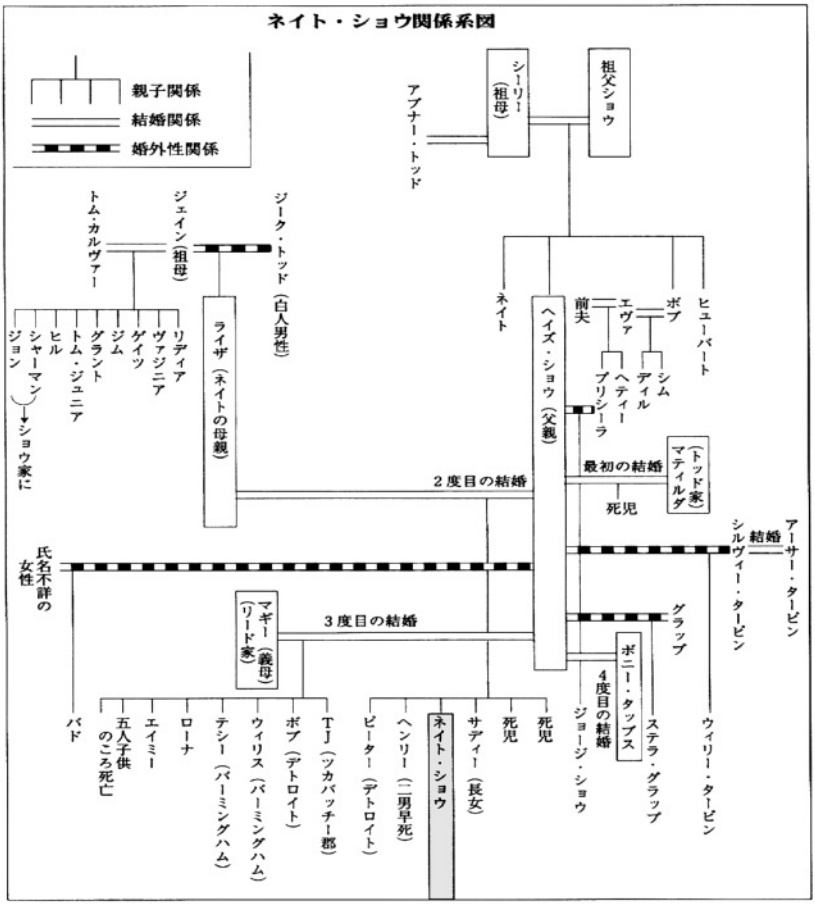
ショウの母親，妻ハナの母親はいずれも白人男性の子供。誰が，誰と誰の間の子供であるかは厳密に記憶していた。死亡率が高いので，再婚はごく普通。移動が少ない地域社会での性的関係は，複雑。6親等以下の性的関係は厳格に抑制されていた。

- 拡張家族の現実。生存戦略。

親類の遺児の引き取り(扶養の義務と労働力への期待)。「子供は財産」

- ショウは「理想的家父長」になろうと努力し続けた。

妻に暴力を振るわず，野良で働かせない。白人の家庭に妻や娘を働きに出さない。家族労働に対しては，支払う。「理想的家父長」になろうとする。教育ある妻（不正な債務契約の回避，作物の分量の計算）への感謝。お産の経験。子どもへの愛情。妻ハナといかに結婚し，いかに愛し助けてもらっていたか。どのように子どもたちを育てたか。家族に買ってやった品々（自動車やガス・コンロなど）について詳しく記憶。



5．ショウは，「歴史」の中に自分を位置づけていた。

- 祖母や父親からの話。奴隷制の現実，「降伏」と解放，その後の偽りの「自由」
- 父親たちの投票権売り渡し，参政権はく奪の経験を見ていた。「自分で考える権利がないといわれることは，おまえは犬だといわれているのと同じ」
- 第１次世界大戦の経験（徴兵されず，綿価格の高騰，黒人帰還兵に対するひどい扱い。）

- 公民権運動の成果を見つめていた。
- 必ず黒人が屈辱から抜け出す日が来ると聖書に書いてある。(北部から正義の救済者が来る。「悪い奴らは，みんな早死にした。」「出獄後，わしに謝りに来た白人たちや『あんたは正しいことをした』と言いに来た白人もいた。」)

6．ショウは，なぜ当局に選ばれたのか。ショウが「対決」の場面でたじろがなかったのは何故か。

- ショウは白人が「模範的な黒人」と認めざるを得ない「危険な黒人」だった。

妻を白人の下に家政婦に出すのを拒否。(反抗的姿勢と判断された。)

1918年，タッカーさんの連帯証文署名を拒否(白人による収奪の方法を経験で学ぶ)

1924年，ショウは，連邦土地銀行からの融資を得て，1600ドルで土地を購入。保証人パーカーが彼の了解を得ずに，債務を肩代わりし，彼の単独債権者となっていた。以後，パーカーとの取引を避ける。

1932年，連邦農業融資銀行に申請し，肥料と生活必需品の融資を受けた。パーカーからの解放を目指す。一緒に申請に出かけた仲間4人はいずれもパーカーの「ニグロ」で，ユニオンのメンバー。いずれも殺されたり，投獄されたりした。地方商人の危機意識。個別人身的支配の弱体化。農業危機による経営の危機を有産黒人からの収奪で乗り切ろうとした。連邦政府の進出を期待しつつ，脅威に感じていた。

- ショウは，次のような確信を持って「対決」に至った。

①今まで正当に築きあげてきた自分の財産を断固として守る正当な行為，②「家族」を守ると言う使命感。「男らしさ」。③連邦政府や北部の「ユニオン」に対する信頼。自分のしていることは正しいという確信の裏付け。

- ショウは，ユニオンの指導者としては異色。

ユニオン・ローカルの指導者の多くは，①黒人教会信者代表(Deacon)，

②第１次大戦帰還兵，③賭博好きの自作農。

７．ショウは，新しい時代の到来を喜び，「人生に悔いなし」として亡くなった。

- 刑務所での経験，冷静な対応。神に目覚める。「奴隷制と監獄については黒人が一番良く知っている。」看守，囚人仲間といかにうまくやったか。
- 家族に家長としての責任を果たせなかったことへの後悔，残してきた「財産」への心配。
- ユニオンへの忠誠（家族に毎月５ドル）
- 1945 年出所した時，社会は大きく変わっていた。

ニューディールと戦争，小作農の権利拡大，黒人の農外雇用。トラクター時代（機械，化学肥料，除草剤・殺虫剤）のラバ農民，妻の死，再婚，子どもたち。「政府の厄介になる。」政府管理下の農業。「わが人生に悔いはなし。」

ま　と　め

1．ネイト・ショウは，一般的に想像される「共産主義」的人間像とは遠い存在。徹底的「個人主義」。自分の利益はあくまでも自分で守り抜くという精神。

2．自由の基礎は，「自己の労働力と生産物の自己管理」と考えていた男。（奴隷制時代の自家菜園における労働力の自己管理の経験を原点としている。）

3．あくなき富の追求＝「白人性」，「その日暮らし」とギャンブルの拒絶，勤勉な労働への誇り。

4．自由と独立の基礎は，勤勉な労働と「ラバの所有」がその第１歩。ラバは南部黒人農民の日常生活の中心的関心。

5．家父長としての強い責任感と誇り（妻や娘を他者，特に白人から守る）。良き家父長を目指す。何をモデルとしていたのか？女性はあくまでも被保護者。息子の教育に関する語りは多いが，娘に関する語りは娘の夫の

暴力について述べる程度で，非常に少ない。

6．独自の人種観（白人の多様性を現実的に認識），階級観（「ビッグ・マン」の支配）

7．北部から来た人々（共産党，ユニオン，連邦政府）をあくまで肯定的にとらえていた。テッドは「わしらの仲間」，救済者の到来を期待。

8．地域のユニオン・メンバーを信用していなかった。大半は「臆病者で逃げ出し，裏切った。」投獄中家族を支えてくれたのは，北部のユニオンと親類。ショウは，黒人コミュニティーの典型的リーダーではなかった。群れない誇り高き一匹狼。

付録

目次

Youth（家族・青春時代）

① 権力者父さんと母さんたちと子供たち
② 親離れ ── 一人前を目指して
③ 結婚 ── 自立への助走

Deeds（独立独行の道 ── 闘いの人生）

① 無一文からの出発 ── ラバと四輪車を買うまで
② 借金漬けからの脱出 ── 白人商人のたくらみを見抜く
③ 出始めたゆとり ── 一途な労働と自給的生活の豊かさ
④ 害虫ボルウィーヴィルとの闘い
⑤ 土地を買い，加治屋もやってフォードを買う
⑥ 息子の成長，副業の成功
⑦ ワトソンの陰謀とユニオンとの出会い ── 対決の時

Prison（獄中生活 ── したたかに生きる）

① 獄中での回心を支えてくれた人たち
② したたかに生きる ── 郷に入りては郷に従え
③ 看守たちの人間模様 ── 模範囚としての信頼
④ 服役中のわが家族

Revelation（神のお告げ ── 新しい人生）

① 再出発 ── 12 年ぶりのわが家，わが家族
② ユニオンの力と最愛の妻ハナの死
③ 子どもたちとのいさかい，ジョウジーとの結婚
④ 潮時 ── トラクター時代のラバ農民

⑤　恥じることなし ── 神様の報い
⑥　引退 ── 政府の世話になる
⑦　お迎えを前にして ── 未来への一翼を担った
Index
家系図
年譜